

これは論文でも小説でもない。何時の日か発表したい小説の草稿のようなものである。文中には資料が多々挿入され話はしばしば脱線するが、主題はあくまで日本書紀にその地名が記されている「熟田津（にぎたつ）」が古代伊予のどこにあったかである。この文は年月をかけて懐で温めてきたものではない。むしろある日突然、書かずにはいられない衝動に駆られ一気に書き上げたものである。

歴史学者は無論、歴史家でもこのようなきわどい内容のものは絶対に書かないだろう。たとえれっきとした証拠が見つかったとしても。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

坊ちゃんが古代史を変えた？

香川大学教授 岡本研正

飛鳥時代の話である。新羅と唐によって滅ぼされた百済（くだら）を再興しようとして、飛鳥朝廷（大和朝廷）は、百済との安全保障条約における人質として来日し、30年余日本に住んでいた百済皇子、余豊（よほう、豊璋〔ほうしょう〕とも呼ばれる）を百済王として即位させ、総勢3万2千の軍勢をつけて朝鮮半島を攻めた。しかし、663年（天智2）、朝鮮半島白村江（はくすきのえ、はくそんこう）において、日本水軍は唐水軍との戦いで壊滅的な敗北を喫し、唐・新羅連合軍に降伏した。この大敗戦の後、中大兄皇子は本土決戦を覚悟して都を飛鳥から滋賀県の大津へ移し（近江京）、北九州から瀬戸内の各地に百済からの亡命軍人の指導を受けて推定20を越える朝鮮式山城（ちょうせんしきやまじろ）を築いた。日本書紀には、この西日本各地の山城築城について時系列的に詳しく記されているにもかかわらず、1970年代の末までは確たる証拠がないとして歴史の学界ではほとんど取り上げられなかった。それどころか、「この不確実性」の故に多くの歴史学者たちは、日本書紀そのものを眉唾物とみなしていた。戦前、白村江の戦については日本史教育では避けて通る風潮があった。それは、謀略外交と軍事力により朝鮮や中国満州を植民地として奪取するとともに、朝鮮人や中国人らを軽蔑することにより優越感にひたっていた日本国民には教えたくない、「国際戦争それも中国と朝鮮の軍隊との戦いにおける大敗北」だったからである。

私が香川に来て（1976年）1～2年後、大阪の民間歴史探求グループが、飛鳥政府としては最後の砦で、書紀の記述からしておそらくは最大規模かつ難攻不落の城であったと思われる高安城（たかやすのき、大阪と奈良を分ける生駒山系の最南峰、高安山の頂に築かれた）の遺構を初めて発見したのを機に、各地で古代山城遺跡の発見が相次いだ（添付記

事参照)。城=き=というのは百済の軍事用語と考えられている。それ以前には、後世に城（しろ）と呼ばれるようになった石垣を有した堅固な軍事拠点はおそらくなかったのだろう。

朝鮮式山城とは、標高数百m（200～450m）の台地状の山を長大な石垣で囲み、谷には複数の水門を設けてダムをつくる。山頂には食糧保存のために多数の倉庫群を設けるとともに田畑をつくる。敵が攻めてきたら、全ての住民が山城にこもり、敵を逆兵糧攻めにする。朝鮮民族（とくに高句麗）がこのような「軍事的大発明」を行ったがために、隋も唐も高句麗への侵攻戦争において数十万人もの犠牲者を出し、国が疲弊し滅んでしまった。その一方、朝鮮民族にも悲劇的発明となった。それは難攻不落の城を多数作ったがために、新羅、高句麗、百済、加耶など朝鮮半島の国々で勝負が決しない戦争が何百年も続くことになり、国の統一が自分たちのみでは為しえないことになったからである。こうした朝鮮半島における内戦の影響で述べ数にすればおそらく何万人にも達するような難民が、安住の地を求めて半島から日本に移り住んだ。これにより漢字や仏教をはじめ大陸の文化や高度な技術がわが国にもたらされた。

1999年、私は百済最後の都であった扶余（フヨ、ふよ）を訪れたが、百済時代の遺物はほとんど残っておらず、奈良正倉院や法隆寺の方がはるかに多くの百済古宝を有していることが分かった。百済観音などの国宝の品々は、おそらく百済王家から朝廷への贈られてきたものや百済からの難民貴族が持ち込んだものであろう。

日本書紀には当時西日本で最も重要な政庁で、軍事的にも要であった大宰府を守るために、敵が攻めてきたときに大宰府の周囲を水没するための水城（みずき、長大な堤、現存）を設けるとともに、周囲の嶺々に幾つもの巨大な山城（最大クラスの大野城—おおのき—では標高400mの嶺を取り巻く石垣の延長は8～10km）を築いたことが記されている。最近の調査では水城の堤防の高さは10m（長さは10km～）で外側には水堀まで設けるなど、すべてが想像を越えるような防備だったことが明らかとなった。

インターネット記事より

日本初の山城

市の北に、なだらかに広がる四王寺山頂 地形図の写真
(410m)にある日本初の山城。

水城が造られた翌年の [665](#) 年に大宰府政庁の北の守りとして、南の備え基肆城（基山）と共に築かれた。（天智天皇命）

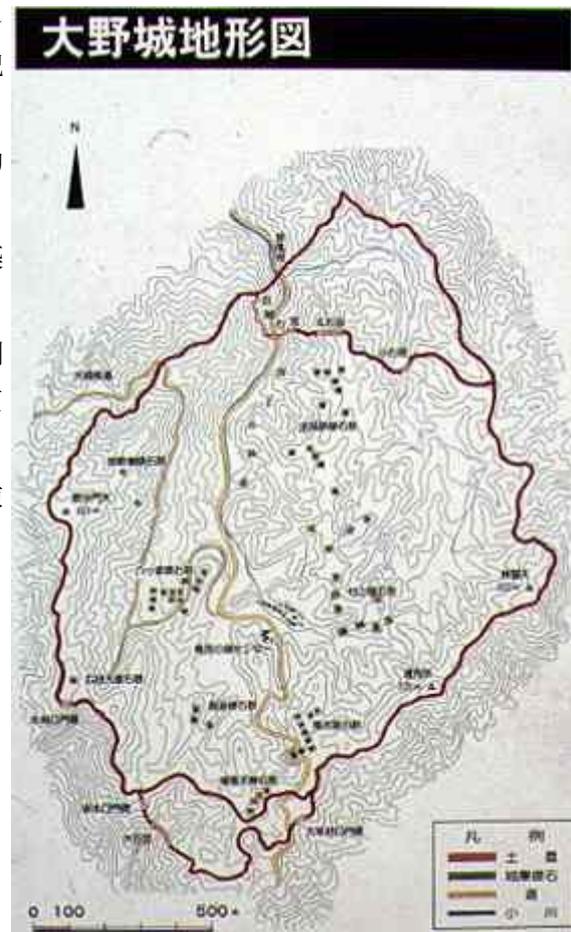
朝鮮半島から渡来した技術者（百済の亡命貴族）の指導で造られ、その形は馬蹄形。

達率憶礼福留（だつそちおくらいふくる）・

達率四比福夫（しふくぶ）を筑紫国に遣わして、大野及びきの二城を築かしむ（日本書紀卷 27）

すり鉢状の四王寺山の稜線を巡る土塁は約 6.5km に及ぶ。

土塁が谷を渡る部分には石垣をダム状に築いて山頂部を囲み、その中に建物を建てた。要所に城門を設けている。百間石垣（宇美側北城門礎石社）、屯水水門、水城口門礎、坂本口門礎、大石垣、太宰府口門礎。現在倉庫跡と思われる礎石が 7 ケ所約 70 棟分、山中に点在している。焼米ヶ原。



白村江後の本土決戦に備えた朝鮮式山城の建設や対馬から飛鳥に至る狼煙（のろし）ライン（現代なら私のやっている光空間通信システム）の設置は、仁徳天皇陵の造成工事など比較にならぬほどの超巨大国家プロジェクトだったのであろう。書紀には、667 年（天智 7）讃岐に屋島城（やしまのき）を築いたことが書かれているが、学者や高松市教育委員会の何度もの調査においても明確な遺構等は見つかっていなかった。ところが、私と屋島洞窟で出会い、その後私から古代朝鮮式山城についての基礎知識を教わるとともに強い啓発を受けたが故に会社をやめ、自宅に屋島城跡研究所という看板を掲げて屋島城調査に没頭した平岡岩夫氏により、1998 年、ついに古代石垣の一部が発見された。そして今年 3 月には平岡氏の熱意によって重い腰を上げた高松市教育委員会による調査の結果、屋島城の城門遺構が初めて発見され、四国新聞や山陽新聞には第 1 面の半分以上をカラー写真で飾る大記事で報道された（添付記事参照）。

私は屋島城調査をけっして止めたわけではなく、屋島北嶺にある想像を絶するような大洞窟、数百トンもの美しい水を深々と湛えた水洞窟、涸れたことのない山上水などの謎の方により大きな「科学的関心」が湧き、もしかしたら讃岐の山々の頂上やその麓には（量

的にはともかく) 涸れることなく水が湧き出ているのではないかという「水の都、讃岐」
仮説が頭にひらめいたので、目下それを先に調べようとしているのである。



書紀に記述はないが、香川県にはもう一つの巨大な朝鮮式山城跡が存在する。それは坂出の城山(きやま=「き」のあるやまの意と考えられる)である。しかし、城山ゴルフ場の建設の際、貴重な遺跡が徹底的に破壊されてしまっており、まことに残念である。

朝鮮式山城遺跡について特徴的なのは、古代(飛鳥~奈良時代)の国府(今の県庁に相当するが、大使館の性格をも有しており古代は「こう」と読んだ。山梨県甲府は甲斐国の府、山口県長府、防府はそれぞれ長州国、周防国の府)の近く、従って国分寺や国分尼寺の近くに築かれていることである。

飛鳥時代~平安時代にかけて讃岐の国府は現在の香川県綾歌郡国分寺町付近にあった。讃岐国分寺遺跡調査は全国でも抜きん出ており、高さ6mの実物大の築地塀や学生僧の寄宿舎が復元され、往時の詳細な模型が展示されている。讃岐国府跡も詳細は未知であるが、場所は確定されている。城山の「城」はいざというとき国府の役人、国分寺、国分尼寺の僧侶などの要人は無論、府中の全住人が逃げ込むためのものだったのだろう。岡山県には書紀には書かれていないが、古代山城と考えられるものが2ヶ所ある。その中で総社市の

近くの山上にある「鬼ノ城=きのじょう」については、この数年間、岡山県による大々的な調査が行われており、複数の城門、水門、等々、いずれも巨大で堅固な多数の遺構が発掘され、ごく最近では立派な城門等が復元されている。私の感触によれば、坂出城山の古代山城は鬼ノ城のそれに非常に良く似ていたのではないかと思う。総社も古代は吉備国の中心で、備中国府、国分寺・尼寺が置かれていた。

なお国分寺と国分尼寺は、今日の地方国立大学あるいは明治～戦前の旧制高等学校〔全寮制〕や師範学校のようなものであり、国分寺は男子校、国分尼寺は女子校である。国分寺・国分尼寺は、仏教精神を基本理念として教えるとともに、国内・国際共通語である漢文の読み書きができ、法律、医学、科学などに関しても広範な知識・教養を身につけた地方行政官や僧侶（＝先生）を各国ごとに養成するのが真の目的であった。薬師如来を本尊とする薬師寺は今日の医科大学に当たるだろう。ところで極めて私的な推理だが、いつの世も高級官僚は自分の利益しか考えないことからすれば、彼らが転勤族として各地の国府を巡って後、京の都に帰ったとき、「帰国子女問題」に泣かされぬよう、子女教育の必要性から政府を動かして国分寺、国分尼寺を立てたのかも知れない。なお、全国の国分寺を統轄するのは奈良東大寺（国分尼寺のトップは奈良法華寺）であったが、東大寺としてはその認識はあまりなかったのか、奈良時代以降は奈良の西大寺が全国国分寺の中心となった。西大寺は東大寺の専横（政治への干渉など）を抑えるために建立されたものであるが、往時の広大な建物、寺域は度重なる火事や戦禍で失われてしまった。近鉄・西大寺というターミナル駅名が大寺としての名残をとどめている。

この歴史は、明治 10 年に東京大学が設置されて以後、その傲慢的権威でもって政治に干渉し各界で横暴を極めるようになったため、政府は明治 30 年に帝國大学令を發布し、東京大学を東京帝國大学と改称し、そのライバル校として京都帝國大学を新たに設置、さらに東北帝國大学（明治 40）など、次々と帝國大学を各地に設置して旧東京大学の権威を抑制していったのと状況がよく似ている。



さて、前置きが非常に長くなったが、話の舞台は古代愛媛県である。まずは愛媛県すなわち伊予の朝鮮式山城遺跡はどこにあるかである。じつは伊予の朝鮮式山城遺跡は、今治市の約10km南、東予市の永納山（えいのうさん）にあり、1977年に発見された（添付の新聞記事を私も読んだ）。だが永納山遺跡の詳しい調査はまだなされていないようである。いや、私の思うに、後述する理由から愛媛県レベルによる大々的な調査は今後ともなされない可能性もある。

奈良時代から平安時代にかけて、伊予国の国府は「松山ではなく」今日の今治（いまばり）市に置かれていた。伊予国府のあった場所はほぼ特定されているが、はっきりとした遺構等はまだ見つからないのだ。一方、国分寺の遺構は7重塔の礎石など一部は発掘されている。「今治市」にこうした古代遺跡があるためか？愛媛県レベルの大きな調査は遅れている。ともかく、永納山が伊予国府からさほど遠くないところにあることから、やはり白村江の戦いの直後に作られた朝鮮式山城の一つと考えられている。



聖武天皇が全国に国分寺（および国分尼寺）を建立するよう詔が發布されたのは、奈良時代中期の741年（天平13年）であるが、713年〔和銅5〕に朝廷から各国に風土記編纂（人口、戸数、地史、人物史、名産品、耕地面積等などの編集）命令が出されていることからすれば、各国ごとに国府が置かれたのは6～7世紀の飛鳥時代であろう。

今治に伊予国分寺が置かれたのであるから、百済国が破滅の道を歩み始めた7世紀の中頃すでに伊予国府は存在したに違いない。伊予国には古代（大和～平安時代）の一級街道の一つであった南海道が通っており、しかも瀬戸内海水路を抑える要衝の地であったため、格の高い「上国」とされた。そのため、歴代の伊予国司には錚々たる名前が並ぶ。865年（貞観7）藤原基経、974年（天延2）藤原道隆は後の関白だし、986年（寛和2）藤原公任は和漢朗詠集の編者、1159年（平治元）には平重盛、1185年（文治元）には源義経が任命されている。さらに1215年（建保3）には新古今集の選者藤原定家も就任している。実際に赴任したのは、平安初期の頃までであろうが、それにしてもすごいものだ。

.....

インターネット資料：[伊予国府跡と伊予国分寺](#)

伊予国府

伊予を訪ねるに当たって、今治市の教育委員会に問い合わせたところ、文化振興課の渡辺さんから、大変親切にも貴重な資料をたくさん送っていただいた。

しかし、国府の跡は推定だけで、はっきりしていない。

何度か有力な推定地を発掘しているが、確とした発見が未だ無いようだ。それでも大体のことは解りつつあって、今治市の上徳地区が有力だという。当時の太政官道に近い富田小学校あたりに、国衙（こくが、国府庁舎）のなんらかの建物があつたらしい。



写真 富田小学校の正門

伊予国分寺

伊予国分寺は、今も真言律宗の金山国分寺として、四国五十九番札所として信仰を集めている。

創建期は不明だが、天平勝宝八年（756）道場具領下の詔に出てくるので、孝謙女帝の頃には完成していたものと思われる。行基上人の開創で、弘法大師が逗留して、五大尊明王像を残したと伝えられる名刹である。



国分寺の境内を東に少し離れて、国指定遺跡の国分寺塔跡がある。
民家の中に埋もれてしまいそうだが、心礎を含む12個の礎石がある。
塔の規模は17.4M四方であったらしい。



讃岐国も同様であり、伊予国府ほど華々しくはないが讃岐国府の上級役人（キャリア組）には後に中央政府の歴史的エリートとなった者が多い。かの菅原道真（すがわらのみちざね）も全国的な著名人となる前、讃岐国司として赴任して善政をしき、名声を博した。菅原道真ほど知名度はないが、讃岐国司としては彼のずっと先輩である紀夏井（きのなついで）も有名である。紀夏井も讃岐はもちろん赴任する先々で善政を行い、転任の際には地の人々の涙でもって見送られた。紀夏井は讃岐国司から肥後（熊本）国司となった。今の感覚で

は京の都からより遠い肥後に移らされたのは左遷ではないかと思われるかもしれない。じつは今日と同様、当時、肥後国は「上国」の上の「大国」であり、肥後国司は栄転であった。紀夏井も菅原道真もその有能さと人柄から着実にエリート官僚コースを歩むが、「藤原氏」の他氏族出身者排斥政策のため、紀夏井は応天門炎上事件にかかわったとされて土佐配流（866年、貞観8）、菅原道真は左大臣藤原時平のざん訴により右大臣から大宰権帥（大宰府長官）に左遷（901年、昌泰4）され、ともに悲劇的な末路をたどった。



ところで、飛鳥から奈良時代、松山はどんな町だったのだろう。松山平野の大きさや地勢からしてかなりの人口はあったはずである。古照（こでら）遺跡という古墳時代の遺跡もある。しかし当時の松山の様子を伝えるような史書などはまったく残されていないのである。大きな古墳や古代遺跡は今治をはじめ東予地方に集まっている。

当時もし松山が今治よりも大きな町だったなら、おそらく国府や国分寺は松山に置かれたはずである。松山という地名は江戸初期に城主となった加藤嘉明が名づけた（1603年慶長8年）。愛媛の歴史書には、飛鳥時代に聖徳太子をはじめ、多くの天皇・皇后、皇族が伊予の湯（＝道後温泉）を訪れたと記されている。事実、書紀にはこうした記述があるが、はたして伊予の湯＝道後温泉かどうか、私は疑問に思っている。「596年に太子が伊予の湯

に浴し湯の岡に石碑を建立した」というのは事実ではない、という歴史研究者もいる。もちろん書紀などに『伊予の道後の湯』と記されていれば何ら疑問は生じなかつたらう。

日本書紀には天皇や皇族が、有馬の湯や紀伊白浜の湯に行幸したことが記されている。また伊予の湯への行幸も記されている。遠路はるばる伊予の湯へ行ったのは、伊予の湯が有馬や白浜の湯とは違った趣があったからではないだろうか。私は、伊予の湯は石湯（いわゆ、つまりサウナ風呂）という特色があったからではないかと推察している。

奈良時代中葉までの歴史をほとんどまったく持たない松山としては、天皇・皇族がしばしば訪れた「伊予の湯」は絶対に「道後温泉」であって欲しいだろう。松山のイメージに関して私の個人的所感を述べれば、それは明治期以後まさに正岡子規と夏目漱石によって作られたという感がする。松山は漱石の「坊っちゃん」によって全国的に有名となった。だが小説の内容からして漱石が松山を愛したとはとても思えない。むしろ保守的、田舎的な松山に馴染めないまま東京に逃げ帰ってしまったという印象を受ける。だから松山の人々が漱石を絶対的に礼賛しているのが不思議でならない。極言すれば、松山市や愛媛県の真の歴史、さらには日本の古代史さえもが「坊っちゃん」という小説によってゆがめられてしまったのではないかと私には思えるのである。

661年、飛鳥朝廷は渡来者（じつは政治難民）が圧倒的に多く、相互安保条約を結んでいた百済を救援するために軍隊を朝鮮に送ることになった。だが当時はまだ徴兵制がしかれておらず、政府としては義勇兵を募るしかなかった。そこですでに60歳代の後半という高齢に達していた女帝、斎明（さいめい）天皇が自ら軍を率いて難波の津を出港し、瀬戸内各地に立ち寄り、地域の豪族等の支援を得て各地で義勇兵を募るとともに軍船や武器、食糧を調達することにより、大船団、大軍団を作っていた。兵隊の総数は3万2千にも達するが、そのほとんどが朝鮮の戦において帰らぬ人となった。中には40年も唐に抑留され、幸運にも無事帰国できた讃岐の刀良（とら）や伊予の薬（くすり）などもいた。

斎明天皇は九州博多に急遽設けた朝倉宮に滞在中、不自然な謎の急死を遂げた。中大兄皇子らは母のなきがらを大和に運び喪に服したため、朝鮮出兵はまる1年も延期された。斎明天皇一行には、息子である中大兄皇子（なかおおえのみこ＝天智天皇）と大海人皇子（おおあまのみこ＝天武天皇、兄天智の息子大友皇子を滅ぼして皇位につく〔壬申の乱〕）、額田王（ぬかたのおおきみ、万葉歌人、謎の皇室女性）

<http://www6.airnet.ne.jp/manyo/main/poet/nukata.html>

などの皇族、さらに妻や側室、侍女などが同行して、各地で百済救済のための徴兵キャンペーンを行った。このとき難波から博多までの往復航路において、中大兄皇子や弟の大海人皇子には幾人かの赤子が生まれた。それぞれに生まれた土地の名をつけて名前としたことが書紀に記されている。岡山県邑久で生まれた天武の娘、大伯皇女―おおくのひめみこ―やその弟で福岡県那の天津で生まれた天津皇子などがそれである。

斎明天皇らは伊予に立ち寄った折、伊予の湯で湯治を行ったことが書紀に書かれている。おそらくは徴兵などの作業を進めていたのだろう。そして準備が整い、九州方面に向け伊

予の港を出港するに際して詠まれた歌が万葉集にある、かの有名な

「熟田津(にぎたつ)に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」

である。

この歌の作者は万葉集などでは額田王となっているが、最近では齋明天皇自身が作ったという説が有力である。

じつはこの熟田津がどこにあったかがいまだに分からず論争となっている（古三津説、御幸山麓説、堀江説、西条説、今治説など）。松山はその外港である三津浜を比定地としており（古三津説）、あくまでも「伊予の湯＝道後の湯」という路線を貫こうとしている。しかし、考えてもみよ。天皇家一族こぞって大軍を率い朝鮮半島の戦に出陣しようとしているのに、伊予国の首都でもない松山に立ち寄り、道後温泉で湯治などするだろうか。当時、朝鮮半島は全土を巻き込む戦争状態であり、日本国内でも韓三国（百済、新羅、高句麗）からの渡来民やその末裔氏族、さらに各氏族を支援する貴族や豪族の間で派閥抗争が起こっていた。もちろん親百済外交をとる飛鳥朝廷の要人に対して新羅が差し向けた殺し屋やスパイの暗躍もあったであろう。国府以外の地に長く逗留することはきわめて危険だったはずだ。国家的大イベントである齋明天皇一行の行幸については、事前に各地の国府に通達がいていたことであろうし、当然、国司らに護衛兵の召集も命令されていたであろう。今日だって天皇や皇太子などが地方に行幸する際には、県警総出どころか、警視庁や近隣諸県から応援の機動隊や警察官が招集される。また、皇室一行が逗留する迎賓館や近習が宿泊する館も必要であろう。とすれば、齋明天皇一行が訪れた伊予国の都市は、その都である今治だったはずである。なお、「今治」という地名については、1604年（慶長9）東予地方 20 万石を領して入国した名将、藤堂高虎（とうどうたかとら）が、「今より新たな政治を始める」といって旧名の今張を今治と改めたということである。

齋明天皇一行が伊予国府において、兵士、軍事物質調達のためにしばらく滞在したとすれば、彼らが訪れた「伊予の石湯（いわゆ）」というのは、今治市桜井地区にある湯ノ浦温泉かまたは今治市を流れる頓田川（蒼社川）を約 15km 遡ったところにある鈍川（にぶかわ）温泉、または湯ノ浦温泉だったのではないだろうか。

鈍川温泉：<http://www1.pasutel.co.jp/nibukawa/>

湯ノ浦温泉：<http://www8.ocn.ne.jp/~yunoura/yurai-onsen.html>

資料 湯ノ浦温泉

□由来一ゆらい

湯ノ浦温泉のある今治市桜井地区は、波静かな瀬戸内海燧灘に面し、「日本の渚・百選」に選ばれた百砂青松の美しい海岸線と緑豊かな丘陵地が続いています。近辺には、伊予国や国分寺、国分尼

寺の史跡が残り、南海道に沿ったこの地区は、古くより伊予国府の政治、文化の中心地でありました。

また、当「道の駅」周辺には、「湯我谷」「湯之上」など温泉にちなむ地名が数多くのあり、海岸部には、国分尼寺を開山した尼証爾が開設したとされる石風呂が今も残っています。これらのことから光明皇后(弘法大師)ゆかりの施薬院、悲田院、また大湯屋の存在なども連想され、古代より、大規模な保養・治療の場であったことが伺えます。

その後、地殻の変動などにより、自噴していたとされる湯泉水が途絶えておりました(注)が、昭和五十二年、今治市が泉源開発に成功し、一千年余の年月を経て、湯ノ浦温泉として現代に甦りました。

泉質は、放射能泉及び単純泉で療養効果の顕著なことから、環境庁より、平成六年に、四国で唯一の国民保養温泉地に指定されました。

ここ湯ノ浦温泉は、クアハウス、桜井総合公園の他、リゾートホテルなども建ち並び、古代から引き継がれた保養地として、海を体感できるフィットネスリゾートとして、多くの人々で賑わっています。

歴史・文化に浸るもよし、健康増進のために温泉保養やスポーツをするもよし、瀬戸内の新鮮な魚介に舌つづみを打つもよし。多様なメニューを用意して皆様のご利用をお待ちしております。

□効能—このう

神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩、冷え性、疲労回復、慢性消化器病、痔病、うちみ、くじき、健康増進、動脈硬化等成人病……等々

(注) これはきわめて重大な事実である。これが伊予の「天皇湯宮」の存在が不明となった原因ではないだろうか。大地震により温泉が湧いたり枯れたりするのは中央構造線地帯では過去にもよくあった。

鈍川温泉は愛媛県では道後に次ぐ温泉であるが、知名度は比較にならないくらい低い。松山市を東京にたとえるなら、今治市はその歴史的背景からして奈良、京都、大阪堺港を合わせたような都市である。何故、今治は松山に対してこうした歴史的価値を誇示しないのだろうか。それとも近世の新参都市松山が、歴史都市今治を葬り去ろうとしているのだろうか。

さて最後に、なぜ今治(古代の土地名は?)やそこにあった国府、国分寺などの旧跡が四国の歴史から消えてしまったかについて自説を述べたい。

伊予国府の存在が抹消されることになった最大の原因は、承平・天慶(じょうへいてんぎょう)の乱にあると思われる。この乱は平将門(たいらのまさかど)と藤原純友(ふじわらのすみとも)の京の都の朝廷に対する反乱であり、935年(承平5)にまず将門が常陸国で、これに呼応するかのように936年(承平6)伊予国の前掾(じょう)・純友が自ら海賊を率いて朝廷に対し反抗した。純友は朝廷から赴任を命じられた伊予国の掾(今でいえば助役ぐらいに相当。国選知事である「守」は名目だけのもので、本人は京に居てほとん

ど赴任しなかった：遙任〔ようにん〕という）であり、瀬戸内を中心に活動が激しくなった海賊の討伐を命じられた。そして伊予国守兼南海道追捕使として差し向けられた紀淑人（きのよしひと）に協力して海賊を帰伏させた。ところがこの功績に対して朝廷からの恩賞がまったくなかったため、紀淑人からの帰京命令に従わず海賊に組して反乱行為にでた。反乱軍は、淡路、讃岐、土佐などの国府を襲うなど、瀬戸内地域を中心に中国、四国、九州で徹底した略奪行為を働いた。讃岐国府では多くの人々が殺戮され国府庁舎群は焼失した（939年、天慶2）。土佐国府でも多くの役人が殺された。おそらくこのとき、純友の乱のまさに火元であった伊予国府、国分寺などの政庁舎、寺社、地方貴族の館などはことごとく灰燼に帰したことだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・・

資料： 讃岐国分寺跡資料館のホームページより

天平時代の古代寺院の遺構をとどめる国の特別史跡「讃岐国分寺跡」



古代には讃岐国に属していた香川県では、聖武天皇の勅願によって造営された「讃岐国分寺」と「国分尼寺」は、現在の綾歌郡国

分寺町に置かれていました。また、国分寺町に隣接する坂出市府中町は、当時の政治の中心であった「讃岐国府」の

あったところで、歴代の讃岐国司の中には菅原道真などの名前もみられ、当時、国分寺町から府中町にかけての一角が讃岐国の政治や文化の中心であったことがうかがえます。現在、四国霊場第 80 番札所として大勢の参詣客を集めている国分寺は鎌倉時代に再建されたもので、奈良時代の天平年間に建てられた当時の建物は全く残っていません。しかし、昭和 58 年度から開始された讃岐国分寺の発掘調査によって、寺域の東限を画する大きな溝や築地、北限および西限の築地などが明らかになり、当時の寺域がほぼ確定され、さらに、鐘楼跡と思われる礎石建物や南北約 20.6m、東西約 11.8m の大規模な掘立柱建物、僧房跡、回廊跡などの遺構が徐々に確認されるなど、天平文化の粋を集めた古代寺院の実像が徐々に明らかになりつつあります。

往時の僧侶の生活様式を今に伝える僧房跡に建てられた覆屋を訪ねて



昭和 58 年度に始まった調査の中でも特筆されるのが、現在の国分寺本堂の北側、約 15m の場所で発掘された「僧房跡」です。僧房とは、国分寺に働く僧侶たちが共同生活をしたとされる長屋形式の建物のことで、讃岐国分寺の僧房は、間口

88m、奥行き 16m の基壇上に立つ東西 84m、南北 12m の長大な礎石建物で、ほぼその東半分がすべて発掘されるとともに、西半分に関しては基壇裾が明らかにされています。この僧房跡は、国分寺としては最大級の規模であるばかりでなく、礎石や基礎部分（地覆石）がきわめて良く残っており、建物の内部構造やそこでの僧侶たちの生活などを知ることができます。このように国分寺における僧房の構造や僧侶の生活様式などを目の当たりにできる遺構は全国的にも例のない画期的な発掘であることから、現在、遺構の上には風雨を防ぐために“覆屋”が設けられており、広く一般に公開されています。また、寺域の東隣には「讃岐国分寺跡資料館」があり、館内には、発掘調査で出土した瓦や土器、20 分の 1 の奈良時代の金堂模型などが展示されています。

.....

ところで、純友は日振島（ひぶりじま）を根拠地とする海賊と結んだとされている。松山に純友の居住地跡といわれる所があることや、日振島が宇和島の西沖合 25km に位置する小島であることを考えると、もしかしたら伊予掾（いよのじょう）としての藤原純友の実際の任地は、伊予国支庁が置かれていた（のではないかと思われる今日の）松山あるいは宇和島だったのではないだろうか。つまり純友はノンキャリアとして今治の伊予国府本庁に置いてくれなかったことにも憤懣を持っていたのではなかろうか。

一方、平将門は常陸国府（現在の茨城県石岡市）をはじめ関東の国府を次々襲ったが、その際決まって「国印」を奪っている。つまり国府の一握りの役人を殺したり年貢として倉庫に保管されている穀類等を奪うことは主目的ではなく、むしろ国印を奪うことが目標だったのだろう。国印が無くなればその地はもはや朝廷の勢力が及ばぬところとなるとともに、様々な証文（豪族と国司が交わした年貢に関する契約や国司の届け出た領地等の登記簿など）が無効になるわけで、そこに反乱軍の真のねらいがあったのかもしれない。平将門反乱そもそもの起こりは、将門が叔父である平国香（たいらのくにか）を攻め殺したことであり、当初、常陸国国司や朝廷の側としては関東平氏一門の私闘とみなし介入しなかった。おそらく領地や権力をめぐっての争いだったのだろう。将門は常陸の地に独立国を作ろうとしたとの有力な説もある。近畿や西日本と違い、関東ローム層で覆われ畑作が中心で貧しかった関東地方にあって、常陸国（今日の茨城県）は霞ヶ浦やその周辺に多数存在する湖沼のおかげで大稲作地域であった。江戸時代、常陸を徳川御三家の一つである水戸徳川家の領地としたのもこうした事情があったのだ。

西の純友軍も国府庁を次々襲っているところをみると、彼らも国印を奪おうとしたのだろう。純友軍は博多の大宰府も襲い、壮麗な建物群を焼き放った。しかしその後、京から派遣されてきた政府軍により反乱軍は鎮圧された（941年、天慶4）。純友も各地を逃げ回ったが南伊予方面で一族とともに捕縛され、斬首されてその首は京で晒された。

参考： [インターネットより](#)

天慶の乱

当事者1：藤原純友

当事者2：小野好古

当事者3：

時代：平安時代

年代：939年（天慶2年）12月17日～941年（天慶4年）6月20日

要約：海賊である藤原純友を朝廷が懐柔しようとしたが失敗。大規模な叛乱となる。

参議小野好古が追捕使となり討ち取る。

内容：そもそも海賊の正体が前伊予掾（判官）藤原純友であることは、周知の事実であった。彼は伊予国の日振島を拠点に、一千艘余りの船を操って瀬戸内海諸国に出没して、略奪の限りを尽くしていた。

天慶2年(939年)12月17日、藤原純友は国守紀淑人の制止を振り切って叛乱を起こし、これを朝廷に報告しようとした備前介藤原子高を部下に命じて追わせ、摂津国西宮付近で捕らえ、藤原子高の耳を切り鼻をそいで同道していた息子を殺害、さらに子高の妻を奪って逃走した。朝廷は翌年正月、参議小野好古を山陽道追捕使に任命し、現地に派遣したがはかばかしい成果はあがらなかった。その間にも朝廷は藤原純友に従五位下（京都なら侍従クラス、地方なら上国の守クラス）の位を授けて彼を懐柔しようとしたが、これも失敗した。そこで8月に入って近江国の兵士百人を阿波国に送ったのを始め、諸国に命じて兵士を動員し、追捕使の体制も強化した。しかし10月には、安芸・周防で海賊と戦って敗れ、周防の鑄銭司が焼き払われるという事態も生じた。

こうして徐々に活動の場を西に移していった純友は、天慶4年5月、筑前国に上陸して一気に大宰府を攻め、守備兵を撃破して府内の財物を奪い建物に放火した。この報を受けた追捕使小野好古らは、直ちにそれを朝廷に報告する一方、海陸両面より兵を進めて大宰府に向かい、5月20日博多湾において海賊の軍勢と対決した。好古の部下の大蔵春実らは、敵の陣に突撃して多くの海賊を打ち倒し、海賊の船に火を放ってこれを焼き払い、また八百艘余りの船を捕獲した。この戦闘で純友の軍勢は壊滅に近い打撃を受け、純友もかろうじて小舟に乗って伊予に逃げ帰ったが、6月20日伊予国警護使橘遠保によって息子重太丸もろとも斬られ、7月7日その首は朝廷に進上された。ここに純友の乱は完全に鎮圧された。

藤原純友の乱は、海賊の大規模な略奪であり、朝廷に対して叛乱を起こし、独立国家を成立しようとした平将門の乱とは性格を異にする。

藤原純友が備前介藤原子高を摂津国で捕らえたという知らせが京に届いたのは天慶2年(939年)12月26日、平将門が上野・下野国司を追放したという知らせが京に届いたのは3日後の12月29日。このような東西の大叛乱が同時に起きたため、叛乱の性格は異なっても朝廷にとっては事の重大さに変わりはなく、その日は太政大臣以下公卿たちが宮中にとまりこんだ程であるという。



国宝金印 1 顆

福岡市東区志賀島叶崎出土

<所在地>早良区百道浜 3 丁目 1-1

<所有者・管理者>福岡市(福岡市博物館)

話が大きく外れるが、江戸時代の 1784 年、九州博多の志賀島（しかのしま）において、一人の小作農民が畑を耕していたところ、土中から美しく輝く金印を発見した。これが中学や高校の歴史教科書に出てくる「漢委奴國王(かんのわのなのこくおう)」の文字が彫られた金印（国宝）である。金印が志賀島に埋められていたのは謎である。発見時、金印は大きな石の下に埋められていたそうである。この状況からして金印はそれを盗んだ者によって埋められたものであり、それを所持しているのが見つければ罰せられるから埋めたのだろう。また蓋石は目印であり、いずれ事体がおさまったとき島に行つて金印を掘り出すつもりだったが、それが実現されることはなかった。

私はさらに次のように推理する。金印は他の重要な国印類とともに大宰府庁の「金庫」に保管されていた。純友軍によって金庫が破られた際、侵入者の一人がひととき美しい小さな金製の印鑑があるのに気付き、上司の眼をかすめて懐に入れて持ち去った。しかしほどなく小野好古（おののよしふる、万葉歌人）を最高司令官とする朝廷軍に鎮圧され反乱軍が散り散りになったとき、男は印を志賀島に逃れ土中に埋めた。だが、朝廷軍の残党狩りはきびしく、男は捕まって殺されてしまった。

純友軍に襲われた国府や国分寺、官舎、地方貴族の館などのほとんどは焼かれ、寺社からは貴重な寺宝が奪われたことであろう。承平天慶の乱は朝廷軍によって何とか制圧された。だが、これを機に朝廷の地方統治の要であった国府の権威は失墜した。官僚たちは国司や掾、大介として地方政庁に赴くことを恐れるようになり、実際には現地に赴任しない遙任がはびこるようになった。××薩摩守、〇〇陸奥守といった形式的地位はこの頃生まれたのだろう。律令制度に基づき「筆は刀より強し」なる格言のごとく、文官による平和

な政治が約 300 年続いてきたが、将門・純友の乱は「刀は筆よりも強い」という事実を世に示した。その結果、朝廷は地方行政を民間（＝地方豪族）に委ねるようになった。これにより平安の栄華を極めた藤原氏による貴族政権は失墜し、政治は平家や源氏による軍市政権にとって代わられることになる。そして再び中央政府から派遣された統治委任者（国選知事等）によって地方行政がなされるようになるのは、王政が復活する 900 年後の明治の御世である。

齋明天皇一行が（もしかすると安芸国、長門国を経て）九州に向けて船出した熟田津という港はいったいどこにあったのか。この真実が明らかになれば、古代史や万葉集の解釈には大々的な修正が加えられることになるだろう。熟という漢字を「にぎ」と読むのはきわめて異例である。熟の意味は「熟する、実る」という意味であるから、熟田は「稲がたわわに実る田」を表現したものであろう。伊予国府があった場所は、今治市内の海からさほど遠くない富田町にある富田小学校のあたりが確実視されている。もしかしたら、「熟田」という地名が後世に「富田」に変えられたのではないだろうか。

齋明天皇らが湯治に行った伊予の石湯（いわゆ）は、熟田の港から川を数里遡ったところにあると古文書に記されており、しかも石湯（川石の間から湯が出ている）という表現からも、今治国府＋鈍川温泉（または湯ノ浦温泉）の組み合わせの方がぴったりする。今治港を出て伊予の海岸づたいに北へ 10km 行くと、そこには鳴門海峡とともに激しい潮の流れで有名な来島海峡がある。

「船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」

（私訳：船出の時期を待っていたら、大潮の月齢（満月または新月）となった。さあ、今だ。漕ぎ出そう。）

は、一般には月の出を見て真夜中に出港したと理解されている。だが、たとえ満月の夜でも夜間の航行は非常に危険であり、天皇一行が乗った船が夜間航行を行ったなどは、私には考えられない。今日でこそ海に面した町や港の灯は夜でも消えることはないが、古代は真っ暗でありいくら老練な水師（かこ）でも岩礁や暗礁の多い瀬戸の海を夜間航行するのは難しかったであろう。むしろ水師の潮読みに従って、干潮、満潮時の潮の流れ（とくに引き潮＝瀬戸内海から外洋に向かって潮が流れる時刻）を見計らって、来島海峡の東から西への急な潮の流れに乗り、天然の高速走行を行ったものと私は考えたい。今治の町はこのように「西行き航路の潮待ちの港」として栄えたのではないだろうか。潮待ちの期間を利用して船舶の修復が行われ、後の来島ドック、波止浜造船、今治造船などの造船所に発展したのだろう。また、水師や客らが船を降りて、宿泊したり温泉で休息したことも考えられよう。今治の向かいにある能島には村上水軍の本拠地だった能島城があり、さらにその向こうの大三島には、水軍（海賊）の守護神社である大山祇（おおやまずみ）神社（日本一の国宝数を誇る）があることからしても、藤原純友は反乱において来島海峡付近を根城とする海賊たちとも組んだものと思われる。

今治やその付近の地が古代何と呼ばれていたか、是非とも調査したいものである。江戸初期（1604年慶長9年）に今治城(高松城と同じく海水を入れて堀とした水城)を築いた、築城の名手として高名な藤堂高虎は、その後伊賀上野に転封され、藤堂氏は明治の廃藩置県まで伊賀上野城に居住した。したがって伊賀上野城に行つて藤堂氏の歴史を調べれば、伊予国への入国記録から今治付近の古地名が分かるかも知れない。

歴史書や万葉集の解釈において、古代伊予の都が松山にあったという誤解や先入観、あるいは意図的曲解により、伊予石湯(いよのいわゆ)とは道後温泉のことであると広く解釈されている。しかも、それ故松山は古代歴史を持つ都市だと宣伝されている。これに公然と異論を唱えるひとがないのは残念である。



松山に歴史が現れるのは越智氏や河野氏の一族などの水軍豪族が鎌倉期に台頭してきた頃からである。河野氏宗家は河野通政のとき後鳥羽上皇らが起こした鎌倉幕府打倒計画、すなわち承久の乱(1221年、承久3)に加担したため伊予の所領を没収されて衰微した。が、幸いにも一族の通久が幕府側についたことから東予地方における河野氏の命脈は保たれた。その後、河野通有(みちあり)が元寇の役で手柄を立て再び伊予の失地を回復した。

河野通有の第7子通盛（みちもり）は松山平野に拠点を移して、現在の道後温泉の地に広大な湯築城（現在の道後公園）を築いた。このように松山が栄え始めたのは鎌倉時代からである。この後、江戸時代に加藤氏やその後の久松氏（＝松平氏）により広大な松山城が築かれて栄えた。明治の廃藩置県の時には、松山藩は15万石、今治藩（松平氏）は3万石余で今治と松山の地位は完全に逆転していた。さらに松山に県庁が置かれ、地方裁判所や旧制松山高校などの教育機関などが置かれるに至って今治との差は決定的なものとなった。

私は、松山に何ら個人的な恨みはないけれど、古代史に関わる「疑わしき歴史」だけは認めたくない。熟田津がどこにあったかにより、万葉集の解釈についてはもちろん日本古代史の重大な解釈修正といった事態もありうるのである。

[2002年7月18日記]